

宇部市総合計画審議会教育文化分科会（第6回）議事録 【要旨】

日 時 平成21年5月14日（木）9：30～12：00

場 所 市役所2階 第4会議室

出席者（委員）玉重彰彦 中野リエ子 園 絹枝 三原節子
（事務局）新総合計画策定室長 廣中昭久 同室長補佐 河村真治
同室主査 篠原 功 ヲドブレ株式会社 石村壽浩
（専門部会）教育次長 杉本繁雄 教育次長 佐貫和巳

1 教育文化分野における今後の方向性（SWOT分析の検討）について

<まちづくりの目標について>

- （事務局） 前回定めたまちづくりの目標「豊かな自然と文化の中で、みんなが心を繋ぎ笑顔で暮らせるまちづくり」について、前回欠席委員の考えはどうか。
- （委員） よくまとめられていると思う。私としては、教育文化のキーワードは「常盤公園」「彫刻」そして家族・地域の「きずな」だと考えているが、今回の目標の中にある「心をつなぐ」という言葉も、「きずな」と同じ意味だと思う、
- （事務局） では、目標については、他の分科会の目標との用語の統一等のため若干の字句の修正を加えた上で、前回結果通りとしたい。

<共存同栄の考え方の戦略への反映について>

- （事務局） 生活環境分科会提案の「共存同栄のまちの歩みにならった教育に重点を置いたまちづくり」について、当分科会での戦略として反映するかを検討いただきたい。
- （委員） 教育現場では、余り使われていない言葉ではないか。
- （委員） 歴史ある言葉で市民に知られていないのならば、市民に認識してもらうためあえてこの言葉を戦略中に入れたらどうか。
- （事務局） この言葉は、第一次計画以来、総合計画にまちづくりの基本理念として位置付けられてきており、次期計画においてもその理念を踏襲したいと考えている。
- （委員） 共存同栄の考え方を踏まえて、戦略中ではもう少し分かりやすい表現としよう。

<特別な配慮が必要な子供たちについて>

- （事務局） 前回の健康福祉分科会との意見交換で、健康福祉分科会から「気になる子供たち」に対する対応の必要性についての指摘があった。
当分科会には、「少子化により児童、生徒数が減少する傾向にあることから、よりきめ細かく質の高い教育を推進する。」という戦略があり、その中に包含されるところか、別に戦略を設けるか検討いただきたい。
- （委員） 戦略は、具体的にやり過ぎると今後の取組が縛られてしまうし、抽象的過ぎても何を言っているか分からない、どのような文章表現に落ちつけるかだが。
- （委員） 「気になる子供たち」の対象は、どこで線引きをするのか。
- （専門部会） 特別な配慮が必要な子供たちと言える。例えば、通級教室の対象は、「言語障害者」「自閉症者」「情緒障害者・選択性かん黙等」「弱視者」「難聴者」「学習障害者」「注意欠陥・他動性障害」「その他心身に障害がある者で特別の教育課程による教育を行うことが適当なもの」という8つの範疇の症状のある子供である。
- （事務局） 健康福祉分科会では、前回の意見交換後、戦略中の対象者の表現を「気になる子供たち」から「発達障害等のある子供たち」に変更した。
- （専門部会） このような子供たちへの特別支援教育としては、生活指導員や介助員がマンツ

一マンで付いて通常の学級で授業を受ける対応のほか、放課後に親が連れてゆき教育を受ける通級教室、知的障害児には「なかよし学級」、専門的な対応が必要な場合の総合支援学校などがある。

教育方法の選択については、本人の安全面や学級全体を維持できるかなどを考慮しながら、保護者の意向を尊重して決めるが、苦慮することが多い。

現在、市内では、介助員・生活指導員・加配教員のいる学級が73学級、通級教室は1校に設置、22年度に通級教室を小学校2学、中学校1校を追加する予定だ。

(委 員) 取組にあたっては、市だけでなく、国や県との連携も必要だと思う。

(事務局) 健康福祉分科会では、早期発見・早期対応がよい結果をもたらすことを重視し、保育園・幼稚園の5歳児を対象とした福祉・教育連携のモデル事業を行っていることや、将来を悲観した親が問題を抱え込んで孤立しないように、障害があっても暮らしていけるといいう明るい将来像の提示の必要性が議論された。

また、子供の状態に合った適切な対応ができるように、通級教室の増加など選択のバリエーションを増やすことが提案された。

(専門部会) 教育委員会でも、現在、幼保小連携事業を重視している。

(委 員) 宇部市には公立幼稚園が無くなったが、大阪は公立幼稚園が多く、自分が大阪で教師をしていたときも、隣接の公立幼稚園の教師にすぐに状況が確認できた。

(委 員) 校区外の幼稚園に通っていた児童も多く、連携が取りにくいのではないかと。

(専門部会) そのような場合でも、情報がやり取りできるようにしている。

(委 員) 核家族化や生活習慣の変化、放任などの影響があるのだろうか。

(専門部会) 障害には先天的なものも後天的なものもあり、一概には言えないが、他動性、不注意、衝動性などの行動にはそういう面があるかもしれない。

(事務局) 「少子化」と「発達障害のある子供の増加」は別の要因であり、医療・福祉的なアプローチが必要なので、戦略を分けたらどうか。

<常盤公園について>

(委 員) これまでの議論の中に出た、常盤公園へのアスレチック施設の整備をぜひ実現したいが、設置、維持には多額の費用が必要と思う。そのために、「市がつくりました、はい、どうぞ。」ではなく、市民の募金による基金を作れないか。

桃山中学校の野外音楽堂の復旧も、時間はかかったが、保護者の協力により実現した。

(委 員) 常盤公園の緑と花と彫刻の博物館をよく利用する。県外の知人を連れていってもすばらしい施設だと評価されるが、入場料は無料だ。入り口に1回100円の募金箱でも置いていただければ、募金するのだが。

アメリカに住んでいたとき、博物館等に行くと、どこにも同じような大きな募金箱が入口にあった。コインを入れるとくるくる回って落ちていくため、子供たちが喜んで親にコインをせがんでいた。

市民が気軽に協力でき、施設にそのお金を使う仕組みが必要ではないか。

(事務局) 常盤公園の整備については、現状では、市民の都市公園としての位置付けと観光資源としての位置付けがどっちつかずで、まず今後の整備の方向性を定めることが必要と考えて全体会議で問題提起した。

現在、市長の指示で、市内に常盤公園活性化推進室を設け、方向性を検討している。市民も含めた委員会の設置も検討されている。

民間企業に委託中の遊園地・動物園の経営をすぐにやめるというのは困難であり、動物のえさ代等の管理経費の収入は駐車料に限られている現状で、整備方針の決定のためには料金体系等さまざまなシミュレーションが必要である。基金についても、そのような中で検討する必要があると考える。

当審議会でも、生活環境分科会において常盤公園の整備についての戦略を協議した。ただし、最上位計画である総合計画で方向性を断定的に決めてしまうと、部局での今後の検討の余地がなくなるため、分科会の戦略としては、今後の整備方針を定めた上で効果的な整備を進めるという内容に止めることになった。

<優先戦略について>

- (委員) 今、大切なことは宇部市民が宇部のすばらしさを知ることだ。それには、よそから人を呼んでこなくても、地域の人自身が教えることができると思う。先ほどの特別な配慮が必要な子供たちも、地域の中での触れ合いを通じて状態の改善がみられるのではないか。
その一歩として、今後、時間的余裕や意欲のある高齢者が増えてくると思われるので、高齢者の知識・経験を学校教育や社会活動に活かす戦略を優先戦略としたらどうか。
- (委員) 今、子供たちの理科離れが進んでいる。充実した高等教育機関を学校教育に活かす戦略を優先戦略としたらどうか。
現在、学校によっては高等教育機関から講師を招致する取組を行っているところもあるが、すべてではない。夏休み科学教室のような取組もあるが、人数に限りがある上に、送迎できる親がいる子供でないと利用できない。親の教育に対する興味関心や時間的余裕の有無によって、教育の機会に格差が生じてくる。学校教育の中で高等教育機関を活用して、誰もが利用できるようできないか。
- (専門部会) 教育カリキュラムに入っていないので学校教育としては困難な点もあるが、放課後子ども教室のような取組の中であれば考えられる。
- (委員) せっかく彫刻という資産があるので、これを教育に活かす取組を優先戦略としたらどうか。
義務教育の各学校に彫刻に触れ合える場所をつくり、質の高い作品から彫刻の芸術性を学ぶ取組、彫刻の清掃活動等を通じてボランティア精神も養う取組などが考えられる。
- (委員) では、教育への「高齢者」「高等教育機関」「彫刻」の活用を当分科会の優先戦略としたい。
- (事務局) 戦略の中に、優先戦略に係る戦略が複数あるので、事務局により戦略を整理し、改めて各委員にお示しする。5月20日までに御意見をいただいた上で、当分科会の戦略としたい。